

『宇治拾遺物語』の特色

— 卷一・卷五の説話を中心に —

萩原 美津子

はじめに

『宇治拾遺物語』に納められている説話には、他書に同話が発見されているものがある。他書との伝承関係を一覧表にした「説話目録」^(注1)によれば、『今昔物語集』に八十三話、『古本説話集』に二十二話、『古事談』に十九話の同文的な同話が発見されている。この他にも、幾つかの文献に同話や類話が発見されており、現在、他書に同話が発見されている説話は百九十七話中百四十三話である。これに対し、数は少ないが、残る五十四話の説話には、他書に見ることのできない、素朴で、親しみやすい内容のものが多い。

本論文では、後者の説話を中心に『宇治拾遺物語』の特色を探り、この書が如何なる説話集であるのかということを探らねばならぬ。

なお、考察に入る前に、『宇治拾遺物語』とこれと多くの同話を持つ先行説話集との関係について記しておく。まず、『今昔物語集』

と『宇治拾遺物語』の関係であるが、両書が親子関係にあるという考え方は、現在ではほとんど否定され、ともに『宇治大納言物語』を祖本にした兄弟関係にあるというのが通説となっている。『古本説話集』との関係も、これと同様、『宇治大納言物語』を祖本にした兄弟関係である。^(注3)これに対し、『古事談』と『宇治拾遺物語』は親子関係にあると言われている。^(注4)さらに、この二書は成立年代が近いから、当時、巷間に流布していた話などを、両書の編者が別々に採録したということも十分考えられる。従って、『古事談』とは親子関係にあり、かつ口承をふまえた兄弟関係にもあると言えよう。

『宇治拾遺物語』の伝承関係については、こうした通説に従い、以下の論を進めてゆく。

一 冒頭句について

『今昔物語集』では全ての説話の冒頭句が「今は昔」に統一されているが、これに対し、『宇治拾遺物語』の説話には種々の冒頭句

が見られる。

「今は昔」

「これも今は昔」

「昔」

「これも昔」

「この近くのことなるべし」

その他(直接書き出したもの)

『宇治拾遺物語』では、こうした種々の冒頭句を持つ説話が、一見したところ雑然と並べられているが、これらの冒頭句の使い分けには、何か意味があるのだろうか。そこで、まず、それぞれの冒頭句の分布状態を調べてみた。以下、特徴的な箇所を挙げてみる。

(e)	(d)	(c)	(b)	(a)	
卷五第四話 〜卷六第一話	卷四第九話 〜卷四第十七話	卷三第八話 〜卷三第十一話	卷二第六話 〜卷三第一話	卷一第十一話 〜卷一第十五話	卷・話
これも今は昔	これも今は昔	今は昔	昔	これも今は昔	冒頭句
主に 笑い話	主に 靈異譚	全て 和歌説話	英雄説話を中心に 種々の内容	全て 笑い話	内 容

(注5)

八十三話

六十五話

三十三話

三話

一話

十二話

(i)	(h)	(g)	(f)
卷十三第十一話 〜卷十三第十四話	卷十二第十話 卷十二第二十二話	卷十第五話 〜卷十第十話	卷六第二話 〜卷六第八話
今は昔	今は昔	今は昔	今は昔
全て 靈異譚	和歌説話と 倫理説話	主に 靈異譚	主に 靈異譚

こうしてみると、同一の冒頭句はある程度連続していること、その内容も同一のものが多くということがわかる。さらに、これらはその伝承関係も同じであることが多い。例えば、(a)と(e)は「これも今は昔」で始まる説話だが、これらのほとんどは、現在、他書に同話が発見されていないものである。(d)も同じく、「これも今は昔」という冒頭句を持つ説話であるが、こちらは『古事談』に同話が発見されているものが多い。(c)の説話は全て『古本説話集』に、また、(i)の説話は全て『今昔物語集』に同話が見られる。

以上のように、同一の冒頭句によって始まる説話は、内容的にも伝承的にも共通している場合が多く、そこには一定の規則があるように思える。そこで、この一定の規則を明らかにするため、これらの冒頭句と「説話目録」に掲げられている伝承関係の一覧表とを組み合わせ考察を行なってみた。その結果、次の(i)から(iii)の四点が明らかになった。

(i)『古本説話集』に同文的な同話が見られる二十二話の説話のうち

ち、巻七第四話と巻十五第六話を除いた二十話は、「今は昔」という冒頭句を持つ。内容から見ると、その約半数にあたる九話までが和歌説話である。『古本説話集』と『宇治拾遺物語』に共通する説話に和歌説話が多いのは、上巻に和歌を中心とした説話を多く集めている『古本説話集』の性格によるものと思われる。

(4) 『今昔物語集』に同文的な同話が見られる八十三話の説話のうち、その半数近くが「今は昔」という冒頭句を持ち、次いで「昔」という冒頭句が三割近くを占めている。内容的には種々の話がある。ただし、この中で「昔」という冒頭句を持つ説話に、巻第十三第四話「亀を買ひて放つ事」のような昔話風の話が含まれていることは注目したい。

(5) 『古事談』に同文的な同話が見られる十九の説話のうち、その八割近くが「これも今は昔」という冒頭句を持つ。これは前述の「今は昔・昔」という冒頭句を持つ説話に比べ、主人公が時代的に新しい人物であることが多く、『宇治拾遺物語』の編纂された時期に近い頃の話であると思われる。

(6) 他書に同話が発見されていない五十四話の説話のうち、半数の二十七話が「これも今は昔」という冒頭句を持つ。内容的には口誦的な笑話が多い。これも(5)と同様、主人公が時代的に新しい人物であることが多い。これに比べて、数は少ないが、「昔・これも昔」という冒頭句を持つ説話もある。この中には巻一第三話「鬼に瘤取らるる事」や巻九第八話「博打擲入の事」といった口誦的な昔話風の話が含まれている。

以上のことから、冒頭句と伝承関係の間には、次のような規則があると推測される。

①(4)・(5)より、『宇治大納言物語』を祖本としている説話には、「今は昔」という冒頭句を持つものが多い。

②(4)・(5)より、口誦的な昔話風の説話には、「昔」または「これも昔」という冒頭句を持つものが多い。

③(4)・(5)より、時代的に新しい説話や口誦的な説話(これは②における口誦的な昔話風の説話より時代的に新しいもの)には、「これも今は昔」という冒頭句を持つものが多い。

このうち、①に含まれる説話は祖本の特色を受け継いでいる可能性が非常に強い。『宇治拾遺物語』の特色を探るのには適当でない。また、②は数が少ないので、参考程度に留まらざるを得ない。

これらに対し、③に含まれる説話のうち、現在、他書に同話が発見されていない二十七話が、『宇治拾遺物語』独自の説話として、その特色を最も顕著に表わすものと考えられる。

この二十七話の説話は、『宇治拾遺物語』全十五巻において次のように分布している。

巻一↓八話、巻二↓〇話、巻三↓二話、巻四↓一話、巻五↓八話、
巻六↓〇話、巻七↓一話、巻八↓二話、巻九↓〇話、巻十↓〇話、
巻十一↓二話、巻十二↓〇話、巻十三↓〇話、巻十四↓二話、巻
十五↓一話 (計二十七話)

こうして見ると、巻一と巻五に各々八話ずつと、この二巻に集中していることがわかる。そこで、次の項では、他書に同話が見られず、「これも今は昔」という冒頭句を持つ説話のうち、特に、巻一と巻五に収載されている説話を基にして、『宇治拾遺物語』の特色を明らかにしてゆこうと思う。

二 卷一・卷五の説話から

卷一第二話「丹波国篠村平茸生ふる事」では、不浄説法をした僧は平茸に生まれ変わるとされている。不浄説法というのは、もちろん僧として許されぬ行為であるが、この話には、それに対する強い否定や仏教的な戒めの態度というものがほとんど感じられない。編者は、こうした僧にあるまじき行為というものを、どのように捉えているのだろうか。以下、僧を主人公とした説話を基に、この点について考えてみよう。

卷一第五話「随求陀羅尼額に籠むる法師の事」、続く卷一第六話「中納言師時法師の玉茎検知の事」は、いずれも「いかさま僧」が主人公である。両話とも主人公が物々しい格好をして登場し、人々をだますという形をとっているが、これは「尊き僧」に見せかけで、多くの喜捨に預らうとするための演出である。そして、彼らはいかにも真面目くさった顔で、「額の傷は随求陀羅尼を籠めた時のものだ」「随求陀羅尼額に籠むる法師の事」とか、「煩惱を断ち切るため自分自身の一物を切り取ったのだ」「中納言師時法師の玉茎検知の事」という嘘をついており、これは僧として誠に許しがたい行為である。しかし、編者はこの僧の行為を否定するわけでもなく、説話の結びに教訓的な言葉も付けてはいない。「こういってことを仕出かす奴も世の中にはいるんだよ。まったくあきれてしまうね」といった寛容な態度で主人公を見つめているのである。だまされた人々も怒るのではなく、あまりの馬鹿馬鹿しさに、思わず笑い出してしまうている。この人々の朗らかな笑い声は、そのまま編者自身の笑い声でもあり、困ったことを仕出かした主人公を見つめる

編者の姿勢を象徴したものと言えよう。ここに、編者のほのぼのとした、暖かな人柄が感じられる。

このように、僧にあるまじき行為をしておいて、その化けの皮を剥かれても、なお、平気でいるというずうずうしい「いかさま僧」もいるが、卷一第十一話「源大納言雅俊一生不犯の鐘打たせたる事」の主人公のように、自分が僧であることと人間であることの間にはさまり、苦しむ小心者の僧もいた。この僧は「いかさま僧」の場合とは異なり、自分自身で「かはつるみ」をしていることを告白して人々の笑われ者となったために、むしろ哀れな感じさえ受ける。編者はここで、厳しい戒律の中にあつて俗人的行為を捨て切れない僧の苦しみを、「悪い事だ」と決めつけたりはしない。それどころか、その正直すぎる僧の態度に好感さえ持っているように思われる。ここに、弱い人間を見つめる編者の寛容な態度が表われている。この説話もまた、人々の笑い声の中で幕が降ろされ、教訓的な言葉は付けられていない。

以上の説話は、全て民間笑話と思われる話であるが、これらは庶民性に志向した新興仏教が、時代の転換期において台頭してきた結果、文学の世界に登場したものである。こうした話を口語りにより聞き知った編者は、「まったくあきれた僧もいたものだ」と苦笑しながら、この作品に書き留めたのだろう。そこには、既成の概念などには囚われない編者の人間把握の態度が見られる。また、どの説話も多くの会話文を用いることにより、事件や主人公の心理を巧みに表現し、親しみやすい文章に仕上げられている。

僧でさえ、これほど「性に係わる事件」が多いのだから、まして一般の人々の間に、こうした事件が起きないはずがない。卷一第十

四話「小藤太算におどされたる事」は、その代表的な作品といつてよからう。

この話で最も注目すべきことは、男性の「あの物」に関する写実的な描写である。このことは、前掲の「中納言師時法師の玉茎検知の事」にも言えることである。

○さて小侍の十二三ばかりなるがあるを召し出でて、「あの法師の股の上を、手を広げて上げ下しさせられ」とのたまへば、そのままに、ふくらかなる手して、上げ下しさせる。(中略)あやにくにさすり伏せける程に、毛の中より松茸の大きやかなる物のふらふらと出でて来て、腹にすはすはと打ちつけたり。(注9) (P. 65)

(中納言師時法師の玉茎検知の事)

○衣をば顔に被きながら、あの物をかき出して、腹をそらして、けしけしと起しければ(後略) (P. 76)

(小藤太算におどされたる事)

こういつた「あの物」に関する写実的な表現は、これまでの王朝文学のそれとは趣きを異にするものである。この他にも、巻五第十一話「仲胤僧都地主権現説法の事」において、

犬は人の糞を食ひて糞をまるなり。(P. 218)

という表現があるが、この「糞」という言葉も王朝文学では使われないものであった。ここに、時代の流れに伴う文学の移り変わりが見られる。

「小藤太算におどされたる事」に続く巻一第十五話「大童子鮭盗みたる事」も性にまつわる説話である。これは、鮭を盗んで懐に入れた盗賊が、この鮭を運ぶ人夫頭に見つかつてしまい、着物の前を無理矢理に開かれた時に、

あはれ、もつたいなき主かな。こがやうに裸になしてあざらんには、いかなる女御、后なりとも、腰に鮭の一二尺なきやうはありなんや。(P. 78)

と、「鮭」に「裂」を掛けた駄洒落を言い放つたという話である。政治的に不安定な時期だっただけに、現実の社会では盗賊などが多くはびこっていたであろう。この説話は、そういった盗賊を主人公にした話ではあるが、そこには暗さはなく、むしろ馬鹿げた洒落によって人々の笑いを呼び起こしている憎めない盗賊の姿が描かれている。ここに、編者の人間把握における基本的な姿勢が見られる。

また、会話を多く使用することにより、主人公の性格や心の動きをよく表わしている点も注目される。例えば、人夫頭から鮭を盗んだのではないかと疑われた時には、

さる事なし。何を証拠にてかうはのたまふぞ。わ主が取りて、この童に負ふするなり。(P. 77)

と言い、このあたりまではまだ平然と構えているが、人夫頭が二人とも懐を調べてみればわかると、着物を脱ぎ始めると、

さまでやはあるべき。(P. 78)

と、だんだん逃げ腰になってくる。そして、ついに自分の着物を無理矢理に脱がされてしまうと、今度は開き直つたように、先程の駄洒落を言い放つ。こうした会話文により、その時々々の主人公の心の動きが手に取るようになる。文学的にも高度な作品と言えよう。

これまで挙げてきた説話の主人公が全て男性であったのに対し、巻五第七話「仮名曆あつらへたる事」は、珍しく女性を主人公にした笑い話である。これは、でたらめな仮名曆を信じて、何日も大便を我慢していた女房が、とうとう堪えきれずに洩してしまったとい

う内容の話であるが、『宇治拾遺物語』において、こうした若い女性の生理現象を笑いの種にした説話というのはほとんどなく、この話の他には巻第三第二話「藤大納言忠家物いふ女放屁の事」に見えるだけである。それも男性を主人公にした話に比べると、かなり軽いタッチで描かれている。これは、女性を主人公にした性にまつわる話というものが、男性のそれに比べて、からっとした明るい笑いになりにくい場合が多いため、編者は女性を主人公にした話なるべく避けるようにしたのでないだろうか。『今昔物語集』や『古事談』などの先行説話集に、女性を主人公にした性にまつわる説話が見られることから考えても、編者がこの種の話をまるで知らなかったとは思えない。しかし、それを敢えて書こうとしなかったのは、編者が性にまつわる説話に求めているものが、明るく、おおらかな笑いであったからではないだろうか。

このことは『宇治拾遺物語』が当時の戦乱の様子を描いた説話をほとんど持たないということにも通ずる。昔の戦乱や武士の様子を描いた説話はあるが、当時の戦乱の様子を描いたものは、巻第四第十四話「白河院おそはれ給ふ事」と巻八第五話「東大寺華嚴会の事」の二話だけであり、それも前者では前九年の役について、後者では東大寺炎上についてほんの少し触られた程度のものである。戦乱の最中に、その戦乱の様子を描けば、やはり生々しく、重苦しい雰囲気感が漂うこともあるだろう。編者はそれを避けたものと思われ。さらに、盗賊を扱った話にしても、前掲の「大童子鮭盗みたる事」のように全く残忍性を持たず、どことなく憎めない人物を主人公にする傾向が『宇治拾遺物語』には多く見られる。これらのことから、編者はこの書の編纂にあたり、「エロ・グロ」の甚だしい話

を切り捨てるという態度をとったことが推測される。これも、編者が『宇治拾遺物語』を単なる教訓の書や備忘録としてではなく、多くの人々に楽しんで読んでもらう書として編纂したことを物語るものであろう。「仮名磨あつらへたる事」は、女性を主人公にしたがらも、こうした編纂意図に反することのない話であったため、ここに載せられたものと思われる。

以上のように、『宇治拾遺物語』における笑いは、「性に係わる事件」を通して表現されているものが多く見受けられるが、この他の話材を用いた笑い話にも注目すべき作品がある。例えば、巻第十二話「児の搔餅するに空寝したる事」、続く巻第十三話「田舎の児桜の散るを見て泣く事」は、ともに子供の心理を巧みに捉えた傑作であり、『宇治拾遺物語』の代表作と言えるものである。

「児の搔餅するに空寝したる事」では、省ける言葉がまるでない程、簡潔な文章であるにもかかわらず、状況の設定から主人公の心理、さらに周囲の人々の笑い声に至るまで鮮明に描かれている。一度呼ばれて、すぐに起きたのでは、ぼた餅の出来上るのを待っていたと思われのではないかと考え、もう一度呼ばれるまで待とうという主人公の配慮。この配慮は全く子供らしくないものである。そして、もう一度起こしに來てくれるのを待っているが、ムシャムシャと盛んに食べる音が聞こえる。このままではぼた餅がなくなってしまうのではないかと心配する主人公。このあたりから、だんだん子供らしくなってくる。もし、これが大人だったら、恥をかくことを避けるため、残念だがぼた餅をあきらめて、そのまま寝てしまおう。中には、口惜しさのあまり、まんじりともしないで夜を明かしてしまおう人もいるかもしれないが)しかし、この主人公の場

合、恥をかくことを恐れる気持ちより、食べたいという欲求の方が強かったため、ついに、とんでもない時に「はあい」と返事をしてしまうのであり、ここに、子供らしい、素直な感情が表現されている。この場合の子供らしさとは、すなわち人間らしさである。編者は乙にすました人間の上面より、その人間が本来持っているはずの性格や感情に注目していたのである。

「田舎の児核の散るを見て泣く事」では、桜の花の散るのを見て「もののはれ」を感じた僧と、この桜の花を散らしている風が自分の父の作った麦の花まで散らし、そのために収穫が減るのではないかと心配して泣いた田舎の子供との感覚の違いがみごとに描かれている。この子供の持つ感覚は、王朝人の忌み嫌うものであった。こうした新しい、そして、生活に密着した庶民の感覚が文学に取り上げられるようになったということは、時代の流れに従って、衰えつつある貴族文化に取って変わろうとする新しい文化の芽ばえが、文学に反映したものであるとして注目される。

この二つの説話からは、これまでの文学では、話材としてあまり取り上げられることのなかった「子供の心理」というものに対する編者の関心と理解の深さが窺われる。この他にも、巻五第六話「同清仲の事」の陪従のように、身分が低いものであるゆえ、王朝文学ではほとんど登場することのなかった人物を、『宇治拾遺物語』では主人公として活躍させている場合が多く見られ、ここに階級意識を離れ、全ての人々に深い興味を持っていた編者の説話収集の姿勢が窺われる。

三 『宇治拾遺物語』の特色

以上、巻一・巻五の説話のうち、他書に同話が見られず、「これも今は昔」という冒頭句を持った説話の考察を行ってきたが、これから得られた特色は、次の七点である。

(一) 口語性を多分に含む笑話が多い。

(二) 人間心理の描写が巧みである。

(三) 会話文が多く使われている。

(四) 王朝文学では見られない人物が登場する。

(五) 短編のものが多い。

(六) 仏教色が薄い。

(七) 教訓性がほとんど見られない。

次に、この七つの特色が、単に巻一・巻五から選ばれた説話における共通点であるだけでなく、『宇治拾遺物語』全体の特色としても認められるものであることを明らかにするため、巻一・巻五以外の説話において、これらの特色を検討してみよう。

まず、(一)の特色について見てみよう。『宇治拾遺物語』には、笑話が二十八話あるが、そのうち他書に同話が発見されていない説話は十九話であり、約七割を占める。これらは口語りを直接採録したと思われるものが多い。前述のように、『宇治拾遺物語』は書承性の濃厚な説話集であるが、この笑話に属する説話は、他書に同話が発見されていないものが多い。だから、『宇治拾遺物語』独自の作風を備えた説話であると言える。

(二)の特色を持つ説話としては、巻十一第六話「蔵人得業猿沢の池の龍の事」が挙げられよう。これは、自分ででたらめなことを言っ

ておいて、終いには、そのでたらめが本当なのではないかと錯覚するようになってゆく人間心理の変化を見事に描写した作品である。この場合も、編者は主人公の愚かしい行為を批判しておらず、「鼻蔵」と「鼻暗」という、いわば語呂合わせのおかしみにより幕を降ろしているところに、彼の寛容な人間把握の態度が見られる。

この説話は、他書に同話が発見されておらず、編者自身の創作によるものか、あるいは、口語りによる話を筆録したものか詳かではないが、いずれにせよ、『宇治拾遺物語』独自の説話として、その特色を知る上では重要な作品である。

(三)の特色を持つ説話としては、巻九第四話「くうすけが仏供養の事」、巻十一第九話「空入水したる僧の事」、巻十四第七話「北面の女雑仕六の事」などが挙げられよう。いずれも他書に同話は発見されておらず、編者の「説話作家」としての技量が遺憾なく發揮されている作品と言える。特に、「空入水したる僧の事」は、会話を多く用いることにより、人間心理の描写を巧みに行ない、また、僧を主人公にしながらも仏教色は薄く、教訓性もない笑い話であるという風に、先に挙げた七つの特色のほとんどを含んでおり、これこそ最も『宇治拾遺物語』的な作品と言えよう。

(四)の特色を持つ説話としては、巻九第八話「博打罽入の事」が挙げられよう。博打といったアウトサイダー的職業は、王朝文学ではあまり注目されていなかったものであり、ここに、貴族中心であった文学が、徐々にではあるが、庶民の文学へと移り変わってゆく様子が窺える。

この説話は、先行文献に同話が発見されておらず、また、その内容や文体から見ても口承による説話であると思われる。そして、こ

れと同系の話は、現在に至るまで、民話として多くの地方で語り継がれている。この他にも、『宇治拾遺物語』には、我々がよく知っている「こぶ取り爺さん」や「舌切り雀」といった話と同系のものが、巻一第三話「鬼に瘤取らるる事」、巻三十六話「雀報恩の事」(いずれも他書に同話は見られない)として収められている。これらの説話から、『宇治拾遺物語』の編者が、口誦性を多分に含んだ民間伝承の話に非常に興味を持っていたことがわかる。

(四)の特色である短編性は、『宇治拾遺物語』に限ったことではなく、説話文学全体に言える特色である。しかし、同じ短編であっても、『古事談』のように備忘録の域を脱していない説話集に対し、『宇治拾遺物語』は文学的に優れた説話を多く持っている。ここにも、『宇治拾遺物語』を多くの人々に親しんでもらいたいと願う編者の横顔が窺われる。

(四)の特色は、先に挙げた「藏人得業猿沢の池の龍の事」や「空入水したる僧の事」など、口承によると思われる説話だけでなく、書承伝承による説話においても見ることができる。『宇治拾遺物語』は全体の四割以上が仏教説話であり、その他にも、僧を主人公にした説話や仏教的素材を取り入れた説話を多く持つ説話集であるにもかかわらず、そこには仏教色がほとんど見られない。これらの説話は仏教的教義よりも、むしろ、その説話の持つ物語的なおもしろさによって採録されたと思われるものが多く、ここに、既成の概念に囚われない編者の自由な精神が感じられる。

(四)の特色は、特に口承によると思われる説話において顕著である。他書に同話が発見されていない五十四話の説話の結びを見てみると、簡単な後日譚や編者の感想程度のものを付けてあるものが多

く、さらに、こうした結びの言葉さえ持たないものもかなりある。これらに対し、「だから、これこれしてはいけない（または、しなければならぬ）」といった教訓的な結びを持った説話は、この五十四話のうち、巻一第三話「鬼に宿取らるる事」・巻三第十六話「雀報恩の事」・巻三第二十話「狐家に火つくる事」・巻三第五話「夢買ふ人の事」のわずかに四話に過ぎない。

一方、他書に同話が発見されており、書承によると思われる説話の結びはどうであろうか。まず、同文の度合が大きい『古本説話集』とは、本文だけでなく結びの言葉まで全く同じであるというのが、二十二話の同文的同話のうち十話もある。残り十二話も表現上のわずかな違いはあるが、ほとんど同じであると言えるものである。これに対し、『今昔物語集』との同話における結びの言葉には、両書の間にかんがりの違いが見られる。例えば、『宇治拾遺物語』巻第十八話「藏人頓死の事」と『今昔物語集』巻三十一第二十九話「藏人式部孫貞高、於殿上俄死」語^二は同文的な同話であるが、両話の結びの言葉を比較してみると、前者では故人が主人公の夢に現われて、泣く泣く手をすって喜んだという後日譚だけで結ばれているのに対し、後者はその後、

然^レと、人^ヲ為^ス専^ニ情可有^キ事也^{ナリ}。

此思^フ、頭^ノ中^ニ將^シ然^ル止^ム事^ナ人^ナ也^{ナリ}、然^レ急^ニ寄^テ被^テ俸^ケル^也トヤム、

此聞^ク人^ノ皆^テ頭^ノ中^ニ將^シ讚^ム語^トトヤム語^ト伝^ハル^也トヤム^{（注12）}

という言葉が付けられており、前者に比べて教訓的であることがわかる。

これは、『宇治拾遺物語』と『古本説話集』では祖本の説話にある教訓や感想の言葉を、そのまま忠実に書写したのに対し、『今昔

物語集』は仏教説話の結集を志した説話集であるので、^(注13) それにふさわしい説話にするために本文のみならず、結びの言葉にも改変・加筆をしたものと考えられる。こうして見ると、『宇治拾遺物語』の淡々として、批判性の少ない説話の結び方は、そのまま祖本『宇治大納言物語』の性格であったことが推測される。

このように、『宇治拾遺物語』の編者は、書承による説話の場合には、その祖本に教訓や感想の言葉が付いていればそれを忠実に書写しているが、口承による説話の場合は、特に教訓など付けず、それぞれの説話の持つ興味ある出来事に重きを置いていたものと思われる。

以上の考察から、先に挙げた七つの特色は、口承によると思われる説話において、特に顕著に認められるものであることが明らかとなった。

四　む　す　び

『宇治拾遺物語』のように他書との間に多くの同話を持つ説話集は珍しいが、これらの説話のほとんどは祖本である『宇治大納言物語』の文章を忠実に書写したものとされる。これに対し、数は少ないが、口語りによる話（『宇治大納言物語』には採られていない話、特に隆国以降の時代の話）で編者自身が聞き伝えたものを書き留めたと思われる説話が採録されている。これらは『宇治拾遺物語』の中でも、また、他の説話集の説話と比較してみても高度な文学性を持つ説話であり、ここに『宇治拾遺物語』の説話集としての価値がある。

このように、『宇治拾遺物語』は、『宇治大納言物語』の精神を受

け継ぎながらも、そこに編者自身の筆による説話を織り込むことにより、祖本を越え、独自の文学性を確立し得た説話集なのである。

〈注〉

1 渡辺綱也・西尾光一校注 日本古典文学大系27『宇治拾遺物語』（昭和三十五年五月 岩波書店）所収、解説三八頁～四十七頁。

2 中島悦次 「宇治拾遺物語の「序」に沿って」 『文学』 昭和九年五月 岩波書店 等を参照。

3 西尾光一 『中世説話文学論』（昭和三十八年三月 塙書房）所収「中世説話文学の形態と方法」 等を参照。

4 益田勝実 「古事談と宇治拾遺物語の關係——徹底的究明の爲に——」 『日本文学研究資料叢書』『説話文学』 昭和四十七年十一月 有精堂）を参照。

5 小林智昭氏は、日本古典文学全集28『宇治拾遺物語』（昭和四十八年六月 小学館刊）の解説（三十一頁～三十三頁）において、『宇治拾遺物語』の百九十七話の説話を(一)世俗説話、(二)仏教説話、(三)混淆説話に分け、さらにそれぞれを、(一)童話・巷談の類、(2)笑い話、(3)靈異譚、(4)和歌説話、(5)倫理・礼節譚、(6)英雄説話、(7)合理説話、(8)陰陽道説話、(二)靈異・異類譚、(2)法験説話、(3)その他、(三)I世俗・仏教混淆説話、(1)靈異譚、(2)笑い話、(3)その他、II世俗・神祇・仏教混淆説話、と類別されている。本論文における『宇治拾遺物語』の説話内容の分類は、全て小林氏の分類に従う。

6 注1に同じ。

7 他書に同話が見られず、「これも今は昔」という冒頭句を持つ説話のうち、巻一・巻五に収載されているものは、以下の十六話である。

巻一第二話 「丹波園篠村平茸生ふる事」

巻一第五話 「随求陀羅尼額に籠むる法師の事」

巻一第六話 「中納言師時法師の玉茎検知の事」

巻一第十一話 「源大納言雅俊一生不犯の鐘打たせたる事」

巻一第十二話 「児の搔餅するに空寝したる事」

巻一第十三話 「田舎の児桜の散るを見て泣く事」

巻一第十四話 「小藤太輝におどされたる事」

巻一第十五話 「大童子鮭盗みたる事」

巻五第一話 「四の宮河原地蔵の事」

巻五第二話 「伏見修理大夫の許へ殿上人行き向ふ事」

巻五第六話 「同清仲の事」

巻五第七話 「仮名曆あつらへたる事」

巻五第八話 「実子にあらざる子の事」

巻五第九話 「御室戸僧正の事、一乘寺僧正の事」

巻五第十話 「ある僧人の許にて水魚盗み食ひたる事」

巻五第十一話 「仲胤僧都地主権現説法の事」

8 後藤興善氏 『宇治拾遺物語』鑑賞（『解釈と鑑賞』 昭和十六年二月 至文堂）に依る。後藤氏は『宇治拾遺物語』には民間種のものも少なくないということを指摘され、巻一だけを見ても、「随求陀羅尼額に籠むる法師の事」、「中納言師時法師の玉茎検知の事」、「児の搔餅するに空寝したる事」、「大童子鮭盗みたる事」などは民間笑話であると述べておられる。

9 本論文における『宇治拾遺物語』の引用文は、全て日本古典文学全集28『宇治拾遺物語』（小林智昭校注・訳 昭和四十八年六月 小学館）に依り、()中にその頁数を付した。

10 これに該当する説話は注7で述べたとおり十六話あるが、本論文では、そのうち代表的な十一話の説話を取り上げ、考察を行なった。

11 長野晋一氏編 『説話文学辞典』（昭和四十四年三月 東京堂出版）百十九頁に依る。筆者の石井次彦氏は『古事談』の説話は備忘録の域を脱しない、言うならば非文学的な説話である。と述べておられる。

12 山田忠雄氏他校注 日本古典文学大系26 『今昔物語集』五(昭和三十
八年八月、岩波書店) 二九八頁。

13 注11に同じ。但し、百三十三頁。筆者は長野晋一氏。

〈付記〉

本論文は昭和五十三年卒業論文「『宇治拾遺物語』研究―卷一・卷五の
説話を中心に―」の第一章第四節「冒頭句について」、第二章第一節「卷一
・卷五の説話から」および同章第二節「『宇治拾遺物語』の特色」を中心
まとめたものである。